

ミクロ熱研究センター長 菅 宏 教授 退官

ミクロ熱研究センター長 菅 宏教授は今年3月に大阪大学理学部を停年退官されました。熱量測定への尽きることのない情熱から生まれた成果をあとに残してのご退官です。

菅先生は戦中から戦後にかけて大阪大学で故仁田勇教授のもとに物理化学を学び、関集三教授の指導で熱測定の研究をされました。以来40年間に数多くの重要な研究を完成されましたが、なかでも1960年代はじめに行われた断熱型低温熱量計の完成は後々まで非常に大きい影響のある出来事でした。それがもととなって、研究が低温にも高温



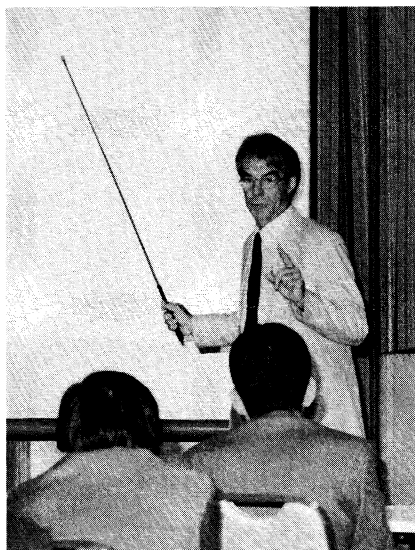
最終講義における菅 宏 教授

にもひろがり、反応系の熱測定とあわせて化学熱学実験施設ができあがったからです。そのまわりには関先生との共同研究による新概念ガラス性結晶の発見など多彩な成果があります。この功績に対して、菅先生は昨年（1992年）8月全米カロリメトリー会議でハフマン記念賞を受賞されました。

去る3月17日には理学部大講義室で最終講義が行われました。「乱れた系の秩序化過程」と題する講演で菅先生は大阪大学における四十余年を70分に圧縮して高密度の話をされました。先生の講義はミクロ熱研究センターと物性物理化学講座の教職員と学生達によって最終講義録にまとめられました。この冊子は残部が少々ございますので、ご関心のある方はお申し出下さい。

また6月19日には箕面観光ホテルにおいて退官記念講演会と記念パーティが開かれました。講演会は菅先生のもっとも重要な研究テーマであるガラス状態と緩和を主題として、大阪府立大学工学部から南 努教授を、またアリゾナ州立大学からC. A. Angell 教授を講師に迎えて行われました。南教授は電気伝導性の高いガラスの発見とその性質について興味深い話をされました。固く凍結しているはずのガラスのなかでイオンが動きまわるという現象は、結晶にしてガラスという菅先生のガラス性結晶と、矛盾概念の結合という点で、相通じるものがあります。

Angell 教授は菅先生と永年の知合いで、今回の講演では、菅先生が協同研究者の方達とともに発見された非晶質水の熱力学的意味について、水の状態方程式という広い立場から、高密度アモーフス状態と低密度アモーフス状態に関係づける



電気伝導性ガラスについて講演される南 努 教授 非晶質氷について講演される C. A. Angell 教授

というたいへん夢のある独自の見方を話されました。

講演会の後、弘子夫人を迎え、金森順次郎大阪大学総長、関集三名誉教授をはじめとする皆様方においでをいただいて、和やかな雰囲気の中に記念パーティがおこなわれました。

菅先生は大阪大学を退官後、近畿大学理工学総合研究所教授として化学熱力学の研究と教育に力をそそいでおられます。そしてこの夏休みにはスウェーデン ウメオ大学に滞在し、久しぶりの実験を楽しみました。滞在中にはIUPACの仕事でリスボンへ行かれ、またチェコ、ポーランド、フランス3国熱測定学会に出席するためブラーハを訪問されるなどますますお元気に活動しておられます。国内では日本熱測定学会会長として化学熱力学国際会議の開催に向けて今後一段とご多忙の日々を過ごされることになりましょう。

大阪大学における研究と教育への菅先生の永年の献身と、とりわけ当センターとその前身である化学熱学実験施設の対する先生のご尽力に後輩一同心から感謝します。

(松尾隆祐 記)